天井裏の妖婆

田中貢太郎

鏑木清方(かぶらぎきよかた)画伯の夫人が産褥(さんじょく)熱で入院した時の話である。

その夫人が入院した時は夜で、しかもひどく遅かった。夫人はその時吊台で病院に運ばれたが、その途中吊台の被(おおい)の隙(すき)から外の方を見ると、寒詣(かんまい)りらしい白衣(びゃくえ)の一面に卍(まんじ)を書いた行者らしい男が、手にした提灯(ちょうちん)をぶらぶらさせながら後になり前になりして歩いていた。そして、目的の病院へ著(つ)いたが、玄関の扉が締(しま)っているので、しかたなく死体を出入する非常口から入った。

それから二三日してのことであった。夜半比(ごろ)、何か

のひょうしに眼を覚ました夫人が、やるともなしに天井の方へ眼をやったところで、そこに小紋の衣服を著（き）て髪をふり乱した老婆がいて、それが折釘のような頸（くび）をさしのべて夫人の顔をぎろりと見た。夫人はびっくりしたが、すぐ、かかる際に取るべき伝説（いいつたえ）に気が注いた。

（此奴（こいつ）に負けてはたいへんだ）

と思ったので、きっと唇を噛んで老婆の顔を睨（にら）みかえしたが、一所懸命であるから数瞬（またたき）もしなかった。と、老婆が忌（いま）いましそうに舌打ちをして、

「おまえさんは、剛情な女だね」

と云ったかと思うと、後すさりして隅の方へ往くなり、消えて見えなくなった。そこへどたどた跫音（あしおと）がして、受持（うけもち）の看護婦が飛びこんで来たが、看護婦は呼吸をはずませながら、

「何か変ったことはありませんでしたか」

と云った。夫人が、

「べつに、なにも」

と云うと、看護婦ははじめてほっとしたような顔をして、

「今、奥さんの室から何人（たれ）か出て往ったような気配がしますから、不思議に思ってますと、この次の次の病

室にいる患者さんが、ふいに天井へ指をさして、何か来た、何か来たと云いながら、呼吸を引きとりました」と云った。それを聞くと気丈な夫人も思わずぞっとした。

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「新怪談集　実話篇」改造社
　　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。